

Luncheon Linguistics, 21 April, 2021

2021（令和3）年4月21日

「英語史研究会第30回大会報告」

発表者：佐田 陸（東京外国語大学大学院博士後期課程）

去る2021年4月10日、英語史研究会第30回大会が開催された。コロナ禍のため、昨春予定されていた大会が中止されたため、2年ぶりの開催となった。対面での大会実施は叶わず、オンラインにて、口頭発表が5件、加えて4名の講師によるシンポジウムが1件行われた。

本報告において、口頭発表より1件、木内祥太氏「後期古英語における接頭辞 *be-* のコノテーション」を取り上げ、やや詳しく紹介した。発表の要点は下記の通りである。従来、古英語における接頭辞 *be-* の機能は、“around, about”に相当する「場所、位置」の意味、およびそれを強めた「強意」の意味をもととなる動詞に与えることと説明されてきた。中には、*becuman* のように、もととなる動詞 *cuman* との意味の違いはないとされてきた動詞もある。しかし、発表者の主張では、*becuman* と *cuman* はたしかに解釈を異にするという。Semantic Prosody の考えに従うと、否定的意味の名詞と *be-* 派生動詞が共起することで、否定的コノテーションが生じ、「強意」の接頭辞 *be-* は、動詞や文全体を否定的に強調することを意味する。実際の例では、否定的な意味を帯びた主語が出現した例が多数見られという。そのことから、一見否定的意味を持つとはみなしにくい主語をもつ例についても、単に *cuman* を述語とするのではなく、あえて *becuman* を述語に選択することにより、書き手が主語の指示対象を否定的にとらえて描いていると解釈できるという。